

キリスト教系学校の「百年史」編纂

—『関西学院百年史』の場合—

小林 洋一 委員

はじめに

西南学院は、90周年を迎える2006年の10年後、即ち、2016年に歴史的な創立100周年を迎える。その記念行事の準備が、それに先立つ2－3年前から始まるであろうことが予想される。そして、これまた予想であるが、その記念行事が話題になるとき、その行事の一環として、百年史刊行が、必要ないという意見も含めて、話題になると思われる。この拙文は、その予想される話題を先取りして、他校の百年史刊行の取り組みを紹介し、学ぶべきものを学び、参考にすべきものを参考にしたいとの思いで記されたものである。

1. キリスト教系学校の百年史

西南学院が百年史を刊行する場合、すでに百年史を刊行している他校のものを参考にしない手はない。その場合、特にキリスト教系学校の百年史が参考になる。本学院大学図書館には、いずれも寄贈図書であるが、いくつかのキリスト教系学校の百年史が収蔵されている。それを創立100周年を迎えた順に並べると以下ようになる。

〈1975年創立100周年〉

『神戸女学院百年史』 2巻

(「総説」1976年刊行、507頁；「各論」1981年刊行、708頁)

〈1978年創立100周年〉

『梅花学園百年史』 1巻 (1988年刊行、579頁＋資料140頁)

〈1984年創立100周年〉

『関東学院百年史』 1巻 (1984年刊行、1032頁)

〈1985年創立100周年〉

『北陸学院百年史』 2巻 (1990年刊行、790頁；「続編」1990年刊行、497頁)

- 『福岡女学院百年史』 1巻 (1987年刊行、1105頁)
(1986年創立100周年)
- 『東北学院百年史』 2巻 (1989年刊行、1384頁；「各論編」1991年刊行、534頁)
(1987年創立100周年)
- 『北星学園百年史』 2巻
(「通史編」1990年刊行、834頁；「資料編」1990年刊行、498頁)
- 『名古屋学院百年史』 1巻 (1987年刊行、673頁)
(1989年創立100周年)
- 『関西学院百年史』 4巻
(「資料編Ⅰ」1994年刊行、654頁；「資料編Ⅱ」1995年刊行、746頁；「通史編Ⅰ」1997年刊行、654頁；「通史編Ⅱ」1998年刊行、738頁)

上記学校の中で、100周年を迎えて、その年に百年史を刊行しているのは、関東学院、名古屋学院の2校であり、他は、いずれも100周年後である。それも福岡女学院の2年から、梅花学園の最高10年と様々である。

II. 『関西学院百年史』 について

1. なぜ『関西学院百年史』なのか

上記キリスト教系学校の百年史を全て紹介する時間的余裕は現在の筆者にはない。そのような場合、一校の百年史的を絞り、そこで学んだことを報告するのが得策かつ有益と考えられる。そのような思いから選んだのが、『関西学院百年史』である¹。なぜ『関西学院百年史』なのか。その理由を挙げれば以下のようなだろう。

- ①手元にあるキリスト教系学校の最も新しい（と言っても8年前）百年史であること。
- ②資料編と通史編に分かれており、西南学院の年史では、これまでこのような編纂がなされておらず、参考になると考えられること。
- ③関西学院学院史編集室副主査池田裕子氏と面識を得て、『関西学院百年史』刊行の経緯と、その書評に関する記事が掲載されている『関西学院史紀要』第6号

1 川崎啓一「関西学院百年史編纂と資料編」『関西学院史紀要』第6号(2000.4.)、197に、関西学院が百年史編纂に際して、他校の年史を研究したり、すでに百年史を刊行しているキリスト教系学校にアンケート調査をしたことが記されている。

(2000. 4) の寄贈を受けたこと²。

2. 『関西学院史紀要』について

『関西学院史紀要』は、『関西学院百年史』と密接な関係があるので、ここで少しその紹介をしておきたい。『関西学院史紀要』の創刊は1991年6月に遡る。『関西学院史紀要』第6号「序文」によると、その創刊の次第は以下のごとくである。関西学院創立100周年にあたり図録『関西学院の100年』が出版され、その後「関西学院百年史」正史編纂に向け実務委員会が発足した。その実務委員会が正史刊行まで、その準備作業の一環として『関西学院史紀要』を随時出版することとなった。その時から8年間、この紀要は第5号まで刊行され、この紀要を基礎として『関西学院百年史』全4巻が完成したとのことである。さらに、その序文には、「紀要」発行の意義と目的が、関西学院の歴史を「広く日本の近現代史、中・高等教育史、さらにキリスト教主義学校の歩みとの関連で捉え、やがて次々と続けて企てられる学院史」の調査・研究の成果を公表し、新しい時代に向けて「建学の精神」を検証し続けることにある、と謳われている。

3. 『関西学院百年史』の概要

まず、全4巻『関西学院百年史』は、いずれもA5版で³、表紙はクロス、色はダイニックスソフトプレインである。『関西学院百年史』は、既述のごとく資料編と通史編に分かれる。時系的には、「北星学園百年史」2巻（「通史編」、「資料編」）のように、「通史編」が先に刊行され、その補足という形で「資料編」が刊行されたのとは異なり、まず資料編が刊行され、その検証・研究に基づき通史編が刊行されるという形をとっている。

関西学院の「資料編Ⅰ」は1994年に刊行され、「資料編Ⅱ」は、次の年の1995年の刊行である。それから2年後の1997年に「通史編Ⅰ」が刊行された。そして「通史編Ⅱ」が刊行されるのが、次の年の1998年である。即ち、関西学院の場合、100周年の記念行事を挙行したのは1989年であるから、その5年後に、まず、資料編が完成し、通史編が完成するのは、そのさらに4年後ということになる。従って、4巻全てが完成したのは100周年から数えて9年後のことであった。

それでは、関西学院は100周年には、その記念行事に関連して、何も出版しなかつ

2 拙文執筆過程でさらに創刊号、2号、3号、12号の寄贈を受けた。

3 上記の「Ⅰ. キリスト教系学校の百年史」で紹介した他校のものも全てこの大きさである。

たのかというと、そうではない。創立100周年を祝う式典に合わせて1989年11月に、既述のごとく関西学院の100年の歩みを8つの時代に区分した図録『関西学院の100年』（208頁）を刊行している。8つの時代区分は、後に刊行されることになる資料編、通史編の章立ての方向性と枠組みを作るものであり、この図録そのものが百年史にとって、それなりに大きな意味を持っていたことが分る。

『関西学院百年史』は、分量的に4巻という大部であるにも関わらず、各巻の分量もかなりなものである。「資料編Ⅰ」が654頁、「資料編Ⅱ」が746頁で、資料編の合計は1400頁となる。一方、「通史編Ⅰ」は654頁であり、「通史編Ⅱ」が738頁である。これまた合計すると約1400頁という大部のものとなる。これは珍しいことではなく、上記の他の学校の場合も大体同じようなものである⁴。100年の歴史をコンパクトになどということはどだい無理な話なのかも知れない。



関西学院学院史編纂室の事務室

4. 『関西学院百年史』の基本方針及びその構成

百年史刊行に当たり、その基本方針の策定は重要である。最初に刊行された「資料編Ⅰ」の編集後記によれば、基本方針は以下のようなものである⁵。

4 例えば、上記、キリスト教系の『東北学院百年史』2巻のうちのいわゆる「総論編」は1384頁の大冊である。

5 この基本方針は、「資料編Ⅱ」の編集後記、「通史編Ⅰ」の序、「通史編Ⅱ」の編集後記でも繰り返し確認されている。

- a 一私立大学の歴史という枠の中だけで考えるのではなく、日本近現代史、教育史、教育行政史との関連を重視する。
- b 建学の精神を明らかにしていくところに編纂の意味があり、学院史としての歴史像を組み立てる。
- c キリスト教主義学校としての関西学院の歴史を記録し、関西学院の教育・研究がこれまで果たしてきた役割を再認識するとともに、関西学院の将来に対して何らかの提言なり問題提起ができないかを模索する。

さらに同編集後記には、学院史が「学術的内容を持ち、客観的な資料に基づく実証的歴史研究として評価を得ること」を目指したと記されている。資料編が先行して刊行されたのは、この実証的研究に基づくという編集方針によるものである。

(1) 資料編の構成

資料編の章立ては次のようになっている。

資料編Ⅰ（1994年3月刊行）

- 第1章 関西学院創立前夜 1860－1889
- 第2章 関西学院創立 1889－1910
- 第3章 専門学校設立 1906－1929
- 第4章 大学昇格運動と上ヶ原移転 1917－1930
- 第5章 大学設立 1924－1934

資料編Ⅱ（1995年5月刊行）

- 第6章 上ヶ原時代初期
- 第7章 太平洋戦争と関西学院 1941－1948
- 第8章 学院の再建と学制改革 1946－1960
- 第9章 大衆化時代から国際化時代へ 1958－1989
- 第10章 学院の百年と建学の精神 1889－1989

「資料編Ⅰ」、「資料編Ⅱ」に収められた資料は、1860年の「ジャパン・ミッション開始に関する宣教師報告」（「資料編Ⅰ」整理番号1）から「昭和天皇葬儀につき休日扱いに関しての学内措置」（「資料編Ⅱ」整理番号419）までの419件を数える（どの資料を「資料」として選別するのかの検討も含めて、「資料」選別に、どれほど多くの

時間と労力が費やされたことであろうか!)⁶。その中には、許認可書類、院長報告、学事報告、学生生活など多岐にわたる資料が含まれている。資料には和文、英文の資料が併載されている(半分以上が英文)⁷。「資料編Ⅰ」「序」によれば、関西学院では創立から第二次世界大戦勃発までの50年間、理事会等の記録類、書類は英文で書かれていたということである。

中野実氏によれば、資料編は一般的に通史的(編年体)構成と事項別構成(人事、学則、経費等を事項に沿って時系列に配列)に分けられる⁸。関西学院の場合は通史的構成であり、歴史的叙述を前提に時系的に資料を配列している。

二つの編纂方法には一長一短がある。例えば、事項別編纂には、一つの事項を漏れなく容易に探し出すことができるという利点がある。しかし、欠点は、その事項の歴史像が描けないということである⁹。ともあれ、関西学院の資料編が通史的構成となっているのは通史編を強く意識してのことと考えられる¹⁰。

この資料編で、注目すべきは、「資料編Ⅱ」の最後に、10章として、「学院の百年と建学の精神 1889-1989」が設けられていることであろう。これは「第1節 戦前のキリスト教主義教育」と「第2節 戦後のキリスト教主義教育」に分けられ、建学の精神に関連する資料が収集されている。

戦前のもものとして注目すべきは、「391 スクール・モットー “マスタリー・フォア・サービス” (大正4年2月) (“Our College Motto. ‘Mastery For Service’”)である(これは西南の“Seinan, Be True To Christ”に相当するものであろう)¹¹。この文章は当時の高等学部長 C. J. L. ベーツ (Bates) (後の第4代院長) によって1915

6 「通史編Ⅱ」の編集後記によると、校訂も事務局スタッフによってなされ、1行1行徹底的に原資料による裏付け確認がなされたとのことで、その作業の大変さが忍ばれる。

7 上記『北星学園百年史』の「資料編」も英文資料が併載されている。

8 中野実「学校史は広義の精神史—『関西学院百年史』に寄せて—」『関西学院史紀要』第6号(2000.4.)、72。

9 同上参照。なお、通史的構成となっている百年史の欠点を補うため、創立111年を記念して事項別構成『関西学院事典』(2001年)(443頁)が刊行されている。この事典の構想は『関西学院史紀要』創刊号(1991.6)、206-207の座談会で既に語られていたことの実現でもある。

10 中野実「学校史は広義の精神史—『関西学院百年史』に寄せて—」、72参照。

11 西南学院の場合、スクール・モットーは創立者の C. K. ドージャーの言葉であるが、関西学院の場合には、創立者の W. R. ランバスの精神を受け継ぐであろう言葉ではあっても創立者の直接的な言葉ではない。辻学「校訓 Mastery for Service と『ベーツ文書』」『関西学院史紀要』第12号(2006.3)、7-25によると、校訓 Mastery for Service は、カナダのマギル大学マクドナルド・カレッジで用いられていたカレッジ・モットーが輸入された可能性が大である。

年に発表されたものである。ここでは、学院のキリスト教主義教育の目指すものが何であるかが説教風に平易に示されている。それは一言で言えば、自分をよく修めて真に人類のために仕えるものたれ、ということである。このメッセージの中に出てくる「強からんことを願ひ、主たらんことを願う」は¹²、趣旨と文脈を理解しつつも、弱い時にこそ強いというパウロの逆説的メッセージを聞き慣れている者にはなかなかストレートで強烈な言葉ではある。

建学の精神との関係で、戦後のものとしては1969年に、院長代行小寺武四郎氏の名によって出された「415 靖国神社国家護持法案に対する要望書」が注目される。宛先は書かれていないが、この法案が憲法に保障された信教の自由をおかすものであり、とくに戦没者のキリスト者遺家族にとっては容認できないのですみやかな廃案を要望している。このような要望書が学校から出されたことに驚きを覚える。その他「418 天皇の代替わりに関する宗教主事見解」と「419 昭和天皇葬儀につき休日扱いに関しての学内措置」も目を引く。政教分離と信教の自由への抵触に対して、あるいは天皇の死の特別祝が天皇の神聖化への道を開くことに対して警鐘を鳴らし、天皇葬儀の国民の休日の日（1989年2月24日）は、大学としては、休日扱いとするが、研究活動をする人の自由を保証するために、大学図書館、学生会館等を閉館して勉学や課外活動の最低条件を保証するというものである。これらの資料は、いずれもを優れた見識を示すものであり、関西学院の建学の精神、あるいはキリスト教主義教育の質を感じさせるものである。

(2) 通史編の構成

通史編は、第二次世界大戦を境として、「通史編Ⅰ」が戦前、「通史編Ⅱ」が戦後を取り扱っている。通史編の章立ては以下の通りである。

通史編Ⅰ（1997年刊行）

- 第1章 関西学院創立の前夜
- 第2章 関西学院創立
- 第3章 専門学校設立
- 第4章 大学昇格運動と上ヶ原移転
- 第5章 大学設立
- 第6章 太平洋戦争と関西学院

12 『関西学院の100年』、ii。

参考文献一覧

通史編Ⅱ（1998年刊行）

第7章 戦後の再建と学制改革

第8章 大学の拡充

第9章 大学紛争と大学改革

第10章 百周年を迎えた関西学院

年表

現況（1989年）：組織図、教職員数、学生・生徒数、1989年度一般入学試験結果、学部別進路状況、規模別就職状況、土地公簿面積、建物面積一覧、蔵書冊数、1989年度財政規模、1989年度学費、課外活動団体一覧、上ヶ原キャンパス・イラスト

沿革：歴代役職者一覧、主要施設設備取得状況一覧、大学学部入学定員の推移、旧学位令に基づく博士号取得者一覧、研究雑誌一覧、オープンセミナー一覧

参考文献一覧

「通史編Ⅰ」は、「第1章 関西学院創立の前夜」をもって始まる。「近代日本とキリスト教という視点から関西学院のキリスト教主義教育の歴史と伝統を顧みる中で、私たちの果たすべき使命を明にする」（「通史編Ⅰ」序）という意欲的試みの下、「第1節 近代日本とキリスト教」、「第2節 南メソヂスト監督教会の日本伝道」、「第3節 神戸の教会と教育」の記述が続いている。これは、キリスト教の日本伝道から神戸の地での関西学院創立に至る前史であり、これまで不十分であった日本におけるメソヂスト・ミッションの検証の試みでもあるとのことである（同序）¹³。まさに原点を求めての探求であるが、日本の宣教史、教会史研究にとっても有益な資料となっている。

「通史編Ⅱ」の最終章は、「10章 百周年を迎えた関西学院」である。その章の「第2節 経営と組織」の中の「キリスト教主義教育」に取り上げられている「関西学院大学改革に関する学長代行提案」（大学紛争後の1969年に発表）は、建学の精神並びにキリスト教主義教育が具体的状況の中で熟考されたもので刮目に値するものであり（513-515頁）、30年経た今日もその輝きを失っていない。そこでは、「学問とキリスト教との厳しい緊張関係の中においてこそ、大学は常に創造的生命に躍動しつつ、そ

13 『西南学院七十年史』でも学院創立を東洋におけるキリスト教の歴史の流れの一部と捉えて、キリスト教の東洋伝道及びバプテストの伝道活動の歴史に多くの頁を割いている。

の使命において協同する真の文化創造体」となると説かれ、キリスト教の隣人愛が、大学という文脈の中で以下のように規定されている。まず、隣人愛は、「相手をただ単に自分の外に自分とかかわりなく存在している人間とみるのではなく、その相手へのかかわりを問題にすることが同時に自分自身のあり方を根本的問題にすることになるような関係である」。さらに、それは、「人格と人格関係を創り出すことに努力」し、「教師と学生、キリスト者と非キリスト者、さらに学問とキリスト教等々の間にも」、「単なる癒着関係でも、併存関係でもない、真の人格関係を樹立する課題をになうことによって、独自の新しい大学を志向」するものである。さらに、隣人愛の関係は「自分を常に相手の批判の前に誠実にすえることを通して『自分を絶対化すること』を厳しく退けるもの」である。そしてこの自己絶対化の問題は、キリスト教自体の自己絶対化のみならず、学問自体の自己絶対化をも厳しく退けることを意味する。それは「自分に安住しがちな学問の固定性を打ち破り学問に真の批判的性格を与え、学問に真の自由な自律性と創造性を与えるもの」である。それ故に、「大学は社会の内包する根本的な問題性をあばき批判するという意味で『批判の府』でなければならず、それを「根源的な意味で堅持することによって」、大学は社会に貢献し、奉仕するものとなる。この「学長代行提案」は、関西学院のキリスト教主義教育の理念と実践の錬磨の深さ、高さを示すものであり、同じキリスト教主義を建学の精神とする西南学院にとって学ぶべき点が多い。



関西学院学院史編纂室の資料庫

ま と め

『関西学院百年史』から学んだことのまとめに代えて、最後に些かな提言めいたことを記す。

1. 「西南学院百年史」編纂準備の好機

関西学院は、これまで『四十年史』『五十年史』『六十年史』『七十年史』を編纂してきていたが、それ以降年史は作成されなかった。しかし、創立90周年を迎えたとき、百年史の編纂が視野に入っていたようである。しかし、具体的準備作業に踏み出すことなく創立100周年を迎えた¹⁴。既述のごとく、関西学院が百年史編纂に着手したのは、創立100周年を迎える2年前、即ち、1987年のことであった。その時点で、百年史は、2年後の100周年に刊行することは不可能で、7-10年の長期にわたる編集作業が必要と認識されていた¹⁵。西南学院が、その百年史を100周年の年に刊行する思いがある場合には、90周年を百年史編纂準備開始の好機と捉え、その準備に入るのが賢明であると考ええる。

2. 「西南学院史紀要」の発刊

関西学院が『関西学院史紀要』を発刊してその百年史刊行に備えたことは既に述べた。西南学院も90周年を契機に、「西南学院史紀要」を発刊することが百年史編纂諮問委員会で決定された。今後この「西南学院史紀要」が、西南学院史の調査・研究の成果を公表する場となり、学内外の百年史編纂に対する協力と理解を得る媒体としても大きな力を発揮することが期待される。最近の大学史あるいは学院史研究は一つの学問分野を形成しつつある¹⁶。それは、年史がすでに伝聞等の学問的基礎を欠く記述や創立者の顕彰から遠くなっていることの証しである¹⁷。

14 川崎啓一「関西学院百年史編纂と資料編」、194参照。なお、この記事には、百年史刊行に至るまでの5分科会からなる編集委員会の組織編成とその作業、特に資料検索と検証作業が詳述されており参考になる。

15 同上、196参照。

16 現在、西南学院大学もメンバーであるが、1996年4月に「全国大学史資料協議会」(2005年4月現在82大学が加盟)が設立され、大学史の研究会、講演会等を行なっている。

17 「通史編II」編集後記参照。

3. 資料編と通史編の編纂

関西学院にとって、通史編の他に、資料編の編纂は初めての試みだったということであるが、西南でもこれを試みる価値はある¹⁸。それは百年史が資料（含南部バプテスト連盟外国伝道局等の在外資料）が十分準備された段階で執筆されるべきであり、歴史的資料批判を踏えて学院の歴史像が組み立てられるべきだと思うからである。それには西南学院に残る第1次資料の整理及び検索・検証が必要であり、大変な手間と膨大な作業が伴うことになろう。しかし、これはいつかはやらなければならないことであり、百年史の編纂がまさにその時である。

4. 出来るだけ多くの編集委員による編纂

関西学院の「通史編Ⅱ」の編集後記によると、これまでの学院史の多くは特定の個人にその執筆が任されたり、また委員会制度をとりつつも実際の執筆は少数の人々によって担われてきた。しかし、今回の『関西学院百年史』では14人の編集委員が主たる執筆者となり、多くの委員がその草稿に目を通すことにしたとのことである。

寺崎昌男氏によれば、百年史は、その大学がこれまで行ってきた実験の検証、歴史的検証を経た自己評価の記録となるべきものであり、「編集体制の組織の仕方、責任者の選び方、財政的・精神的な支援体制の組み方など、沿革史作りのすべての体制の中に、その大学の『実力』が表れるものである¹⁹。西南学院の正史編纂を通して西南学院の「実力」を示すためには、総力を挙げて編集委員会及び作業部会を立ち上げて取り組む必要がある。

5. キリスト教教育にみる建学の精神の総括

『関西学院百年史』編纂の基本方針の一つに「建学の精神を明らかにしていく」ことが挙げられていた。その建学の精神が試練と危機を迎えたのは、先の戦争時であった。「通史編Ⅰ」「第6章 太平洋戦争と関西学院」では、1943年、遂にチャペルが中止状態となり、キリスト教主義教育の危機を迎えたこと、さらには1944年には勤労職員のため授業が停止されたこと等と共に、戦時統制下で、関西学院が報国団、あるいは

18 通史編と資料編方式をとっている学校は少なくない。例えば、上記の『北星学園百年史』、その他、『関西学院百年史』掲載の参考文献によれば、『同志社百年史』、『立命館百年史』もその方式をとっている。

19 中野実「学校史は広義の精神史—『関西学院史紀要』に寄せて—」、82。

本文中の「」は、中野実氏による寺崎昌男氏「大学評価の可能性を問う」広島大学教育研究センター編『大学評価の必要性と可能性』（1990年10月）からの引用である。

はより実効的軍隊組織の報国隊へと変貌して戦時動員体制に協力していく様子が資料に基づき詳述されている²⁰。

大東亜戦争、太平洋戦争、15年戦争と人によって呼び方が異なる先の戦争であるが、その戦時下でキリスト教系学校がなめた辛苦は計りがたいものがあり、それはまさに受難ともいうべきものであった。しかし、結果的には、その戦争に協力してしまったことも厳然たる事実である。確かに「通史編Ⅰ」と「通史編Ⅱ」の区切りが第二次世界大戦ではあるが、その区切りにかほどの断絶と再生があったのか²¹。『関西学院百年史』を見る限り、関西学院は（そして西南学院も）戦争協力に対する確かな総括の機会をもつことなく、戦後の再建と拡充のレールを直走ってきたように見える²²。戦争協力を総括するというような重い課題とどう取り組むべきであろうか。「西南学院百年史」編纂が少なくともそのような取り組みのきっかけになればと願う²³。

〔追記：この拙文は、原稿の段階で関西学院大学経済学部井上琢智教授、関西学院史編纂室副主査池田裕子氏にも目を通して戴き有益なご指摘を戴いた。また合わせて既述の『関西学院史紀要』の他に『関西学院事典』をはじめとする貴重な資料のご寄贈及び写真提供を戴いた。ここに記して心より感謝を表したい。〕

20 「資料編Ⅱ」の、先に触れた「10章 学院の百年と建学の精神」の「第1節 戦前のキリスト教主義教育」にある「404 鮫島盛隆宗教主事報告 1942年度」にも「大東亜戦争の開始以来国家を挙げて聖戦の目的完遂に邁進するに当たり学院に於ける宗教活動も此の線に沿はんことを念願して昭和17年度を過ごした。即ち学生の士気を昂揚し、一死似て君国に報ひんとする尽忠の精神を強固にし、銃後における倫理生活を徹底せしめんと試みた」と戦争協力の様子が報告されている。

21 神崎驥一氏が戦争を挟んだ1940年から1950年の激動の時代、院長を務め、少なくとも指導体制に戦前と戦後の断絶は見られない。「通史編Ⅱ」、34頁参照。

22 しかし、このように言い切ってしまうのは、必ずしも正当かつ正確でないのかも知れない。なぜならすでに紹介したように、「資料編Ⅱ」10章の「第2節 戦後のキリスト教主義教育」に出てくる靖国神社国家護持法案に対する要望書や昭和天皇葬儀に対する対応等は、戦前の自己検証・反省を踏まえての行動に他ならないと考えられるからである。

23 『未来への記憶：こくはく敗戦50年・明治学院の自己検証／明治学院敗戦50周年事業委員会』（ヨルダン社、1995）は、非常に勇気ある自己検証と戦争責任告白である。『大谷大学百年史』には珍しく資料編別冊として「戦時体験集－『学徒出陣』・『勤労動員』の記録」が編纂されている。